

# 花 き

## 実 況

### 1 キク

奥越では、昨年12月5日にJAテラル越前キク部会研修会、12月15日に奥越地域キク生産者研修会が開催され、53名の生産者が参加した（写真1）。

7月植え寒菊は12月15日の雪霜害で葉傷みがみられ出荷不能となった。12月12日がほぼ最終の出荷となった。

秋植えギクは積雪が45cm(大野市富田、1月20日現在)程度で、例年より消雪が早い見込みである。夏秋ギク親株の古枝切りは11月30日、冬至芽摘心作業は1月中旬から実施されており、1月上中旬で大部分の株が終了した。病虫害は親株ハウスに黒さび、白さび病が中発生、アザミウマ類が微発生である。

坂井では夏秋ギク親株の冬至芽摘心は行わず、トンネル被覆が行われている(写真2)。草丈が2~5cm(1月13日)で、白さび病が中発生である。施設栽培の寒菊は、1月まで断続的に出荷され、草丈80~100cm、一部に黒さび病が少発生である。露地暮れ植えは10~20cmで植えつけた状態のままで推移し、一部に黒さび病がみられる(1月13日現在)。

福井市東郷では、夏秋ギク親株として収穫後の切下株を11月上旬にハウスに入れている。12月上旬に台刈り予定である。

丹南(越前町、越前市)では、夏秋ギク親株として昨年収穫後の切下株を昨年ハウスに植え込み、古株整理を行った。越前町では切下株整理は昨年の12月10~20日ごろに行った。

二州、若狭においても夏秋ギク親株の冬至芽摘心を1月下旬から行っている。敦賀市の寒ギク「金ロマン」、「新年の美」、小浜市の「冬一番」、「寒桜」、「新年の美」は収穫終了した。



写真1 奥越地域キク生産者研修会



写真2 親株のトンネル保温



写真3 親株に罹病した白さび病

### 2 スイセン

スイセンの出荷ピークは12月上中旬となり、昨年度の11月下旬ピークよりは需要期に近く、1月18日現在93万3千本で昨年度よりやや少ない。

1月からは水仙まつりが各地で開催された。

### 3 ユリ

春江のオリエンタルは無加温2重ハウスで栽培された「シンプロン」、「カサブランカ」が12月中下旬に出荷された。年末出しの「カサブラ

ンカ」、「シンプロン」のLAユリは一部収穫できず切残しがある。

#### 4 ストック

坂井はアイアンシリーズ等が、福井、関西市場へ出荷されているが、開花が遅く、8月15日播種ものがほぼ終了した。8月下旬ものでは1月下旬以降、出荷量は12月末で日量30～50箱であり、1月の価格は安い。

南越のカルテットシリーズが9月上～中旬に播種され、上旬播種ものが74～100cm、開花始め～開花後半、中旬播種ものが草丈55～78cm、開花始め～開花盛期であり、昨年よりやや開花が早い（1月17日調査、昨年1月20日調査）。

若狭では9月中旬定植のカルテットは収穫終了し、11月上旬定植で本場10～12枚、草丈10～15cmである。

#### 5 その他

福井南部、永平寺のハボタンは、12月6日に目揃え会、12月10～26日まで出荷され、出荷量1万8千本で、昨年より発色が遅れたため全体的に遅れた。

越前市のトルコギキョウは、9月中旬に播種された「ボヤージュグリーン」、「一番星」が11月8～20日に定植され、ビニールトンネル被覆が行われている。8月咲の作型は、は種を1月に行う予定である。あわら市のトルコギキョウは、「ロベラ」、「レイナ」シリーズが8月上旬に定植され、台刈りが行われている。

春江のフリージャは1月中下旬より開花している。



写真4 カルテットシリーズの開花始め



写真5 春江のフリージャ

### 対 策

#### 1 8、9月咲きギクの親株管理と採穂

- 1) 8月咲きの「小鈴」等の場合、1月下旬から2月上旬にかけて、地際部より2～3cm（葉3、4枚）を残して冬至芽の摘心を行う。芽立ちのよい品種では地際部で、芽立ちの悪い品種は地際からやや上がった部位で一斉に摘心（刈り込み）する。
- 2) 挿し穂は摘心をしないで冬至芽をそのまま利用すると、心止まり症状や生育開花が不揃いとなる。また、夏ギクは親株時に高温に遭遇すると挿し穂苗の開花が早まるため、ハウス内が高温にならないように換気を励行する。



### 3) 作業時期目安

作 型	定植日	仮植期間	挿し芽日	冬至芽摘心日
仮植育苗の 8月咲きギク	4/15	3/25～4/14 摘心4/1～4/5	3/11 15℃温床育苗	1/25～2/ 5
8月咲きギク	4/15	—	3/26	2/ 5～2/15
9月咲きギク	5/15	—	4/30	3/10～3/20

※仮植育苗は8月咲きの山手白、広島紅、夏晴等の旧盆に間に合わない品種に利用する。

- 4) 採穂が挿し芽適期より早い場合は0～2℃で貯蔵する。貯蔵する場合は、採穂2、3日前に殺菌剤を親株に散布する。
- 5) 採った穂は調整後に日の当たらない納屋等で広げて乾かす（採穂時の70～80%の水分含量、少し萎えた程度とする）。乾いていないと冷蔵中に穂の曲がりや腐敗が多くなる。
- 6) 穂を冷蔵する場合は冷蔵前に穂を調整し、切り口を下にして並べておく。

穂は乾いた新聞紙に包み、切り口を下にして、30×40cmのポリ袋に200本程度ゆったりとして入れる。完全に密封せず、切り口を下にしてダンボール箱に詰めて貯蔵する。袋の中が蒸れている場合は、乾いた新聞紙を入れ水分調整を行い、3～4日後に新聞紙を取り出す。挿し穂は、冷蔵後挿し芽時まで切り口はそのまま下にしておく。

## 2 親株の病虫害防除

- 1) 苗による本圃への病虫害の持込みを防ぐため、病虫害の防除を徹底する。  
新芽の伸長が始まってからは、週1回の防除を励行するとともに、晴れた日には十分に換気し、白さび病等の病害発生を抑制する。
- 2) 散布は晴れた日に行い、夜間までに植物体に散布した薬液が乾燥していることがのぞましい。
- 3) 床と通路へのモミガラマルチにより、土壌水分を保持し、灌水回数を減らす。  
白さび病が発生していない親株は、ジマンダイセンフロアブルやコロナフロアブル、ステンレス等を週1回定期散布する。発病している場合は、病斑（冬孢子堆）のついた葉を取り除いてからチルト乳剤25(EBI)、ピリカット乳剤、ストロビーフロアブル等の治療剤を散布する。感受性が低くなった（効果が低くなった）薬剤は使用しない。また、効果がある薬剤であっても、同系統剤の連用で効果が低下しないように、異なる系統剤をローテーションで散布し、同じ薬剤や同系統剤をしばらく使用しない。



写真6 親株についた黒さび病

親株搬入時に黒さび病がみられた場合は、罹病葉を除去し、ステンレス等を早い時期に散布する。摘心後の新茎葉への感染を抑制するため、新シュートが出始めたステージ以降、週1回予防剤を散布する。

## 3 トルコギキョウの育苗管理

- 1) 播種から子葉展開後まではしっかり灌水する。本葉が展開するまでは、乾燥させないようにする。
- 2) 晴天時は乾燥しやすいので、ミスト灌水の場合はこまめに散水し、用土表面の乾燥

に注意する。底面給水では、過湿になりすぎないように、過剰な水を排水できるようにしておく。灌水は日中の暖かいときに行い、冷たい水を灌水して根を冷やさないようにする。

- 3) 空中湿度が低いと苗（葉）がなかなか大きくなる。温風暖房機等で加温している場合は、床への灌水等により湿度を保つように工夫する。
- 4) 発芽後、本葉が重なると軟弱徒長や病害の原因になるので、苗の生育状態に応じて、早めに間引きする。
- 5) 定植した苗については、過湿圃場では接地面から白絹病が発生するため、表土が過湿にならないよう心掛ける。
- 6) 県内の冬季の日照は、トルコギキョウの生育にとって十分でないため、トンネル被覆等を行っている場合は、光が十分あたるように留意する。

#### 4 スイセンの開花後の管理

- 1) 露地栽培で12月にそさい5号を20g/m<sup>2</sup>施用した圃場には、2月上旬にそさい5号を20g/m<sup>2</sup>施肥する。
- 2) 12月に施肥を行ってない圃場では、消雪後、2月上旬にそさい5号を40g/m<sup>2</sup>施肥する。水が入る圃場では、排水対策を徹底し、2月上旬と中旬に分肥してもよい。畝間に水が停滞しないように、排水対策もしっかり行う。
- 3) ハウス栽培で12月にそさい5号を20g/m<sup>2</sup>を施用した圃場には、切り花採花後の球根を肥大させるため、そさい5号を2月上旬までに20g/m<sup>2</sup>施肥する。12月に施肥を行ってない圃場では、2月上旬までにそさい5号を40g/m<sup>2</sup>施肥する。ハウスの温度管理は、10℃～25℃の範囲で管理する。